

## いま、河上肇「貧乏物語」を読む

——「貧乏物語」におけるラスキン思想の現代的意義(1)——

池 上 惇

### I はじめに—いま、なぜ「貧乏物語」なのか

ちかごろ、日本人は、折りにふれて、「ゆたかさ」と「ゆとり」を強調するようになってきた。しかし、「リッチ」(rich)と「プアー」(poor)の対比に関する限り、貧乏の語が社会から消え去ることは考えられない<sup>1)</sup>。

河上肇のベスト・セラー作品「貧乏物語」は、京都弘文堂から1917(大正6)年1月に刊行された。すでに大阪朝日新聞は前年の9月11日より物語の連載を開始し、同年12月26日に好評のうちに終了している。同書は、自他ともに認める名文で綴られ、格調の高い社会批評であったが、この労作の大きな特徴は19世紀後半のイギリスにおける芸術経済学者J.ラスキンの思想を併せて読者に伝えたことである。これは後年の「第二貧乏物語」と比較して、この書の際だった特色である。

当時、瞬く間に版を重ねて僅か10箇月たらずの間に13版を果した。その影響力と普及の速度が俾ばれる。戦後は岩波文庫に取められて解題を執筆した故大内兵衛によれば40万人を越す読者をもったとされている。貧乏に対して社会の

1) この論稿は1989(平成元)年11月11日、河上肇生誕110周年にあたっての記念講演が京都大学経済学会と河上肇記念会の共催で法経第2教室で行なわれた際、主催者からの依頼で行なった講演を基礎としている。その主要内容は当日傍聴されていた中日新聞・東京新聞京都支局長、黒住隆興氏と同新聞文化部長、辻通夫氏の御勧めで1990(平成2)年1月16日付けの東京新聞夕刊から10回にわたり「いま、河上肇『貧乏物語を読む』」と題して毎週火曜、水曜(一部は月曜)の文化欄に連載された。やや遅れて中日新聞にも同一内容のものが連載されている。公表の機会を与えていただいた記念会会長、杉原四郎先生、大門英太郎先輩、資料の収集に貴重な御助言をいただいた細川元雄先生に厚く御礼を申し上げたい。

関心を掻き立てた古典の生命力は、まさに、時代を超えているというべきであろう。

ところが、河上自身は好評の「貧乏物語」を2年後には早くも絶版にし、1924（大正13）年には、驚くべきことに「多くの大学教授は人のいうことが聞けない」という通例に従わず、教え子であった榊田民蔵の批判を受け入れて、ラスキンの思想に対する共感を残しつつも、これを空想であったとしてマルクスの弁証法的唯物論へと研究方向を転換しようと決意する。当時、病をえて京都大学経済学部長を辞し近畿地方の温泉郷、和歌浦望海楼にて療養中に詠んだ歌が残されている<sup>2)</sup>。

旅の塵払いもあえぬ我ながら

また新たなる旅に立つかな

彼は日本の近代化と歩みをともにしながら、最初は国家による近代化推進の理解者として、政治経済学を志しつつ、天皇制に期待する国家主義者、センスの溢れる評論家となってゆく。しかし、近代化が実は苛酷で非人道的な公害や災害をもたらし始めると彼は最早、天皇制国家に同調することが出来ない。とくに、足尾の鋳毒事件に象徴される人間の生命力の侵害にたいして、いかなる態度をとるべきか、を考えつづける。無我の愛を信ずる宗教家としての摸索期を経て、さらに、社会問題の解決に取組む大学教授、革命運動に参加する政治家などを体験する。遂には戦争に反対して治安維持法違反に問われ、懲役刑に

2) 杉原四郎、大野英二、住谷一彦、平井俊彦、一海知義、松尾尊允らの編集で河上肇全集が岩波書店から1980年代に刊行されている。この和歌の由来は「自叙伝」中の自画像八（同全集、続5巻）に詳しい。ラスキンと河上の思想との関連は、この全集9巻、13巻を参照。また書簡集には1917（大正6）年3月2日、榊田民蔵宛て書簡（同24巻）をはじめ、思い出も含めて晩年（例えば1939〔昭和14〕年石川興二宛て書簡—全集26巻）にもラスキンが登場する。とくに注目すべき論点は、13巻の月報3に寄稿した木村正身「河上肇とラスキン」である（1982年3月）。この論稿は榊田のラスキン評価に疑問を呈し、「〔人道主義経済学〕は……封建反動だ、とする榊田の主張は盲点がある。……榊田は、ラスキンの〔人道主義経済学〕の基盤だった歴史主義的芸術批判に、内在した様子がない」と指摘している。なお木村正身「ジョン・ラスキン文献目録」香川大学経済論叢、30巻4号（1957〔昭和32〕年11月）参照。

服して出獄後はプロ野球を愛好しつつ、漢詩のうちに人生を語る詩人として67年の生涯を過した。この経過だけをみると先の和歌は、真理をひたすらに求める彼の人生遍歴を語ったようにもみえる。同時に注目されるのは、この歌にある‘塵’に寄せた想いである。後述するラスキンの主著の一つは「ムネラ・プリフェリス」というのであるが、この書名のラテン語の意味は「塵の贈物（あるいは賜物）」である<sup>3)</sup>。

もし、この歌がラスキンの代表作の名称と自分が払い落とさねばならぬ旅の塵を双方ともに歌い込もうとしたのであれば、この歌は単なる人生の旅路を詠み上げただけでなくラスキン思想に傾倒してきた自分への感慨をも込めて歌い上げたものとしなければならないであろう。

彼の主張と書物は絶えず、彼自身によって捨て去られた。彼の政治経済学は常に未完成で、整然とした体系とは言えない。しかし、彼が、真剣な人生との格闘を通じて、経済、政治、文学、歴史、法律、医療、社会など多くの専門家と彼の作品を読む人々に新しい時代の息吹を送りこみえたのは、彼のヒューマニズムに確信と根拠を与えたラスキンの思想に負うところも、また、大きかったのではないだろうか。

河上肇とラスキンについての研究は、まだ開始されたばかりである。小論は「貧乏物語」におけるラスキン思想の検討を手がかりとして現代の経済学研究につながる新鮮な視点を検出して「貧乏物語」の現代的意義を再検討するとともに、現代経済学のパラダイムを提示しようと試みている。この作業が河上肇の思想の現代的意義の再発見にとって何等かの問題を提起しえたならば、これほど大きな喜びはない。歴史はその進行の過程で多くの貴重なものを人類の知的資産につけ加える。しかし同時に歴史は時代の制約を受けて、当時の思想のうちで評価すべきものを評価せず、評価し過ぎてはならないものを評価してし

3) 1871年11月25日付けのラスキンの序文を付した *Munera Pulveris* の原本は上野文庫所蔵、John Ruskin, *Munera Pulveris, Six Essays on the Elements of Political Economy*, London, George Allen, 1907. を参照した。この表題の意味については、浦口文治「ジアン・ラスキン」同文館、1925（大正14）年、第11章、262ページ以下参照。

まうことがある。いま「貧乏物語」を読むことによって「経済学が歴史のなかで失ったもの」を再発見したいと思う。

## II 貧乏物語におけるラスキン評価の前提——経済人と 全人の関連について——

河上がラスキンを本格的に研究して、その成果を公表し始めるのは1917（大正6）年以降である。河上肇「Unto This Last ヲ読ム」は同年の4月に「経済論叢」に掲載され、ほぼ同じ内容は、同「ラスキンの此最後の者にも」として「社会問題管見」に1918（大正7）年4月に現れ、後に京大文学部の教授となる石田憲次が翻訳した「ラスキン著、石田憲次訳〔この後至者にも〕」への「序」は1918（大正7）年5月に公表された<sup>4)</sup>。

河上によるラスキン価値論の集大成は、河上が樺田民蔵に徹底的に批判される「資本主義経済学史的発展」（1923〔大正12〕年）の結論部分に見出されるから河上は、ほぼ数年間にわたってラスキン思想に共鳴していたと考えられる。河上の価値論研究は彼が京都大学経済学部で経済原論の講義を担当するころから熱心に進められたが、研究の素材は多くのアメリカ経済学の文献から取られている。杉原四郎が指摘しているように河上の唯物史観研究でさえセリグマンらのアメリカの研究者を通じて研究されており<sup>5)</sup> 当時のアメリカの経済学はマルクス主義を批判しつつも唯物史観が歴史や経済の研究にとって有益であることを認めて、これを評価する姿勢をもっていた。これは河上の思想を知る上で興味深い事実である。

4) 河上の関連文献は、いずれも、全集9巻所収。J. Ruskin, *Unto This Last, Four Essays on the First Principles of Political Economy*, *The Works of John Ruskin*, Edited by E. T. Cook and Alexander Wedderburn, Library Edition, London, 1905. Vol. 17. pp. 13-114. 飯塚一郎訳「この最後の者にも」五島茂編訳「ラスキン・モリス」世界の名著52, 中央公論社, 1979（昭和54）年。

5) 杉原四郎「社会主義の思想的原点を求めて」社会思想史の窓刊行会編「アソシエーションの想像力——初期社会主義思想への新視角——」平凡社, 1989年。なお、雑誌、「初期社会主義研究」における河上肇研究を参照。

それゆえにラスキンの価値論に出合う以前の河上の価値論は彼の唯物史観研究と密接に関連している。ここでも彼はアメリカの経済学者から多くの着想を得た。特に河上が注目しているのは W. Fite, Individualism, Four Lectures on the Significance of Consciousness for Social Relations, 1911. である。ファイトは当時インディアナ大学の哲学の教授であるが河上は翻訳の許可を得て本書の4講中3講を翻訳し、ファイト著(河上肇抄訳)「唯心論的個人主義」有斐閣、1913(大正2)年11月。として公刊した。河上が、この著書から学んだことは価値論を考える上での基礎的な視点ともいべきもので、端的に言えば、機械的人間と意識的人間を区別して取扱う方法である。ファイトは人間が観察の対象としたものに価値を認めるのは人間がある主観的な目的をもって行動する存在であるからだ、と主張した。これを彼は意識的人間という。意識というものは‘知る’ということと不可分の関係にあるから人間は知っているものや知っている人にたいして価値を判断して評価を下すことができるけれども、知らないことや知りえないことにたいして価値判断をくだすことは出来ない。ファイトが挙げている例によると人間が石炭を焚いて暖をとっているとき、その石炭を掘出したひとと知合であるかどうか、は石炭の利用にたいしてどのような評価を下すかということと密接にかかわっている。よく知っておればその苦勞を評価することもできようが、当人を知らなければ、それが何かの偶然によって掘出されたものか、工夫と苦勞を経てもたらされたものかは不明であり、推測は出来ても評価はできない、と考える。要するに価値とは主観的な評価にかかわるものであって客観的なものではない、ということになる。これは現代流にいえば情報の完全性の度合いによって評価は可能となる、というに等しい。現代の情報理論であれば情報の完全性や不完全性に依じて評価結果の不確実性やリスクの計算をおこなうことになるが、当時の価値論においては価値判断は人間の知識に依存し、判断は意識性に依存すると考えたのである。もし社会における人間関係がすべて、このような主観的な評価に依存するとすれば、自然科学と異なり、社会についての考察においては客観的な観察と

実験によって法則を検出したり論証したりすることは不可能となるであろう。しかしファイトは人間関係のうち、とくに、経済関係については自然科学と同様に観察による法則へのアプローチが可能であると考ええる。

市場という概念にしても当初は顔見知りの売手と買手のかけひきであったが、商業が発展してくると供給者と需要者との関係は相互に知るはずのない、不透明な関係となる。いわゆる‘経済人’の仮定は現実のものとなり‘コストの増加分を最小にして利益の増加分を最大にする’といった経済原則が観察され理論化されることとなる。ここで観察される人間は、本来、さまざまな知識と判断や評価の力をもった存在ではあるが、市場において、いわば‘外側’から、これを観察すれば、主観的判断は消え失せてしまい、経済原則にしたがって動く機械のような人間が残される。このようにして把握された無意識的な人間をファイトは機械的人間という<sup>6)</sup>。

河上は、この区別に賛意を表して経済原論やスミス価値論の研究に応用している。たとえば1913(大正2)年に有斐閣から公刊された「経済原論」には人力車に乗りたいという欲求を分析して金持が散歩の帰りに乗りたいという場合と、腹の減った貧乏人が仕事に疲れて早く家に帰りたいたいという場合とは個人の価値判断からいうと大変な差異があるが市場における料金の決定を論ずる場合には、これらの質的差異は単なる金銭の差のみに還元されてしまう、とし、つぎのように結論している。「此ノ如クニシテ、本来品質上ノ差異ヲ有スルモノヲバ、単ニ分量上ノ差異ヲ有スルニ過ギザルモノ如ク換算スルコトガ、所謂冷静ナル客観的観察ヲ本分トスル科学ノ遣方デアル。」<sup>7)</sup>ここでは、河上は交換価値と価値判断を明確に区別して、外部からの観察と自然科学的方法の重要性を強調して、価値の本来の主観性を認めた上であえて無視する方法を経済学の方法として採用しているのである。

6) ファイト原著、河上肇抄訳「唯心論的個人主義」東京有斐閣書房、1913年(大正2年)、111ページ以下。

7) 河上肇「経済原論」有斐閣、1913(大正2)年、11ページ。

もしも河上がファイトの価値論を徹底させて展開しようとしたならば主観価値説＝限界効用学説的な価値論の展開を試みるか、それとも、人間の意識から独立した客観的法則として価値法則を認めるよう主張する労働価値説の展開に進むか、いずれの道も採りえたであろう。しかし、彼は価値論において、いずれを採るべきかに進む前に、‘価値とは何か’という経済学上の根本問題を解決しようとした。つまり、主要な価値論のうちの、いづれを選ぶかではなくて価値そのものの考察を独自に進めようとしたのである。日本の他の経済学者が大多数そうであったように経済学を外国からの輸入品として取扱い、すでに外国で開発された概念を導入し、どれを選択するか、という姿勢ならば、限界効用価値学説か、労働価値学説かという問題の提起は容易であった。しかし河上は、この道を採用せずに、新しい独自の道を選んだ。それは価値の背後にある‘富’とは何か、という問題と不可分一体のものとして検討されたのである。

河上が価値や富を考える時、ファイトの意識的人間と機械的人間の区別は有用な手がかりとなった。この区別は意識的人間を採り上げることによって、狭い‘経済人’の視点から脱却し、全人格的な存在として人間を取扱う道を開くとともに、‘経済人’と‘全人’の相互関係を検討するという重要な課題の入口に到達している。河上は元来が徹底したヒューマニストであったから自由放任社会のもたらす害悪については批判的で当時の社会政策学会の会員であり、資本主義の欠点の修正については情熱をもっている。従来の経済学がファイトのいう機械的人間の領域に対象を限定されていて、人間の人格が損われる危険のあることは河上のよく知るところである。そうであれば、機械的人間の検討を入口として、その背後にある意識的人間の行動や人間的欲求を視野に入れることがどうしても必要となってくる。

河上がファイトの著作を指針として経済原論を公刊したのはヨーロッパに留学する直前のことであった。1913年10月、日本を発して1915年2月に帰国するまで河上は、特にイギリスの社会思想から大きな影響を受けた。バーナード・ショウ、トーマス・カーライル、そしてジョン・ラスキンがその中心であった

ことは言うまでもない。彼等に共通していたのは河上の信条でもあった人道主義を高く掲げて金銭至上主義の弊害を鋭く批判し、社会の改革における人権と倫理の重要性に着目していたからである。いうまでもないことであるが人権や倫理の問題を経済学が取扱うとき、人間を経済人としてとりあつかうか、それとも、人格をもった全人 (The Whole Man) として取扱うか、は、結論に対して決定的な影響をもたらす。経済人は営業の自由権にもとづいて私的利益を追究する自由をもった人間であるから自由放任の結果として社会の資源が最適に配分されさえすれば、それが福祉の実現であり倫理的な正当性を獲得することになる。しかし、自由放任が人間の能力を全面的に発揮させうるシステムであるのかということになれば、ビジネスの能力を人間の能力と同じものと想定しない限り、能力や個性を発揮しえない状況が生みだされてくる。ケインズが指摘しているように自由放任主義は高い木の枝の葉を上手に食べるという特殊な基準をつくっておいてキリンを競争させれば首の長いキリンは生存競争に生残り、首の短いキリンは餓死する自由しかないという結果に導きやすい。経済的な自由放任はビジネスという特殊な才能を一面的な基準として生存競争を強要する社会システムであろう<sup>8)</sup>。

経済人のみを前提とした社会システムは全人としてみた多数の人間の人権や健康や所得や財産の基礎を脅かす。だとすれば、全人の立場にたつて人権や倫理をあつかう場合には、人間の多様な能力を総合的に評価して個人がそれぞれに力量を発揮しうるように、社会が配慮し、自由放任主義を改めて社会の公共的意志決定に基づくルールをつくらざるを得ない。人間の行為 (営為) を経済人に限定せず、しかも、法的ルールや習慣を創りだして経済人の行為を規制しようというのがラスキンらの基本的立場であった。そしてこれらのルールの背後には人間の道徳的立場という「心の改造」に属する問題が含まれていたのである。いわば、全人という意識的人間の倫理的、道徳的立場から経済人という

8) J. M. Keynes, *The End of Laissez-Faire*, London, 1926. ケインズ著、宮崎義一訳「自由放任の終焉」世界の名著57、中央公論社、1971年。



機械的人間の行為を社会的なルールによって規制するという思想こそラスキンらの思想に共通の特徴であった。例えばラスキンはムネラ・プルフェリスの1871年版の冒頭のページで次のように述べている。

「政治経済学は芸術でもなければ科学でもない。それは科学によって基礎をあたえられ、芸術によって方向づけられる行為と法のシステムである。したがって、それは道徳文化という確実な条件なくしては成立不可能である。」<sup>9)</sup>

当時ラスキンはA. スミス, D. リカード, J. S. ミルらの経済学者を厳しく批判して、人間というものを単なる経済人として取扱うと結局のところは人間を金銭獲得の道具として取扱うことになってしまうことを指摘した。従って従来の経済学の枠組みを根本的に変えてしまい、経済人がつくったシステムを全人のつくったシステムによって社会的に規制しようというのがラスキンのアイディアであった。すでにファイトの哲学によって機械的人間=経済人の世界と意識的人間=全人の世界とを識別していた河上にとって、この思想は科学と人道主義を統合しうる最良のアイディアとして目に映ったに違いない。

### III ラスキンの価値論に対する河上の評価をめぐって

河上の「貧乏物語」は、ある意味で、このラスキンの思想を適用したものであった。彼は自由放任主義の結果であった貧乏の実態を分析して金銭至上主義の弊害を弾劾し、生活の豊かさこそ真の富であると説き、特に金銭至上主義を実践する金持の心掛を厳しく批判する。河上は貧乏物語の「序」で「一部の経済学者は、いわゆる物質的文明の進歩—富の増殖—のみを」文明の進歩の尺度とする傾向があるけれども、自分は多数の人々が「道を開く」ようになることが、真実の意味で文明の進歩の尺度であると考えたと述べ、ラスキンを引用して河上自身の訳語を挿入している。

9) J. Ruskin, *Munera Pulveris*, *op. cit.*, p. 1. この指摘に初めて注目されたのは木村正身氏である。五島編著、前掲、167ページ、注3を参照。

There is no wealth but life. (富者、何物ぞ、只、生活あるのみ)

彼がいう富者とは、今日の「リッチ」な人々のことであり、所有する金銭の多いか少ないかで人を評価するのではなくて、人生を豊かに暮らす力量があるか否かを基準として人を評価しようとする態度が、簡潔な訳語のうちに、よく表されている。

ここに引用されている文章は、河上の引用では出典が記されていないが、1860年に公表されたJ. ラスキンの(1818—1900)の *Unto This Last* に含まれている四つのエッセイのうち、最後の部分にあたってラスキン自身が強調している文章である。ここにいうライフという言葉は日本語で「生活」と訳するしかないが、生活と言え日本では日用品の買物にゆく、普通の食事をする、オシッコをする、などの意味に使われている。しかし、ラスキンがライフと言うのは日常のくらしから始まって芸術、教育、環境の享受と創造に至る人間の生命活動の「すべてのもの」を指している。ライフを「いのちを成長させる」ことと理解し「いのちを成長させることができるように財やサービスや環境を社会が整える」ことを「ゆたかな=wealthy」くらしであるとすると、上の文章は「いのちを成長させる営みがあってこそ豊かさが生まれる」という意味にも取ることができる<sup>10)</sup>。

ラスキンにあっては価値という概念は経済人における交換価値という意味の価値である以前に全人の発達に貢献するという意味での使用価値である。しかも、使用価値といっても人間の欲望を満たす何等かの物というだけの意味ではなくて人間の生命力の進歩に貢献するという客観的な人間諸機能の進歩とかかわる概念であった。これは彼の使用価値論が財の特性を享受しうる人間とその享受のシステムを前提としてなりたっていることと密接に関連していたのである。そして、このような視点からすると交換価値というものはコストなどの供給側の要因よりも、財の特性とそれを享受する能力といった需要側の要因を重

10) J. Ruskin, *Unto This Last*, *op. cit.*, Sect. 77.

視することになろう。もちろん、ラスキンは供給側の要因を無視するわけではない。彼は「消費は生産の極致である」<sup>11)</sup>と主張して消費と生産の関連性を強調するとともに、生産の基本には労働を置き、「あらゆる価格は最終的には労働に依存する」とした上で、「労働は人間の生命が、それに対立するものと争う過程である」<sup>12)</sup>と指摘する。ここで彼が生命というときには、人間の理性、精神、身体力が念頭におかれていて、これらの能力をもった人間が、疑問、困難、試練をはじめとする諸困難や、自然的制約、経済的制約など物質的な力による人間の発達への障害と争う過程が労働なのである。もし需要側の要因を無視して、人間が所有する財についての情報を相互に公開し相互に利益を保障しあうという公正な状況を前提すれば、交換価値は、財の所有者が生命の発達に対する障害をどれだけ克服したかという基準によって評価される、と彼は考えた。もし供給側の行為を需要者が評価しようとすれば需要者もまた、自分自身の体験に基づいて、生命の発達にたいする障害の克服の過程における労働の体験をもたなければなるまい。この過程は単なる筋肉の運動ではなくて、創意と工夫、努力と訓練、知性と教育が必要である。そしてあらゆる財の生産が芸術文化の創造という視点から見直され、生活用品、土地、住宅、公共施設などすべてが文化の視点から総合的に供給されたとき、そこには、新しい都市が生れる、とラスキンは考えた。

しかし、このような都市が生れるには労働における創造性を評価してくれる消費者がいなければならない。創造性や芸術性を評価し、その視点からの優れた製品の供給を促進してこそ生活の改善は可能となる。そこで労働を創造的なものとするには創造性を享受しうる人間を創りだすという重要な課題に人類は直面せざるをえない。これは従来の‘経済人’による財の評価ではなくて‘全人’による財の評価を必要とする。

ラスキンは「栄養がある」とか「美味しい」とかいうパンの性質を財の固有

---

11) *Ibid.*, Sect. 75.

12) *Ibid.*, Sect. 69-70.

価値 (intrinsic value) と名付けた。そして人間が生命力を高めるには、この固有価値を活用して自分の栄養にしたり楽しんだりする能力が発達する必要があると考えたのである。この能力を彼は財の固有価値の享受能力 (acceptant capacity) と呼び、固有価値と享受能力が、ともに生命の発達に貢献したとき、その財は「有効価値 (effectual value)」をもつと主張した。1862年に公表した「ムネラ・プルフェリス」の1、定義の14で彼は言う。

「それ故に有効価値の生産のためには常に二つの必要なものがある。第一は、財が、もともと利用しうるといふ性質をもつものとして生産されていること、第二は、人間が生産されたものを利用する能力を身につけていること。」<sup>13)</sup>

ラスキンにとっては財が「価値あるもの」となるためには、財の利用可能な性質と利用する人間の享受の能力が必要であった。「馬は我々が乗ることができなければ富ではない」という彼の思想に河上は共鳴して1918 (大正7) 年の「社会問題管見」において次のように述べている。

「価値の中 effectual value (有効価値) と称すべきものの成立には、先ず本来有用なるべきものの生産され居り、次に之を使用し得る能力の生産され

13) J. Ruskin, *Munera Pulveris*, *op. cit.*, pp. 11-12.

なお、私見によれば河上の価値論には、経済関係による人間の諸能力の発達の視点が無い。この点は彼がラスキンの価値論を検討するとき、倫理的価値観と解して経済学上の価値論との関係を展開しえなかったことと関連していると考えられる。経済学上の価値論と人間の諸能力との関係を示唆した最近の文献には、A. Sen, *Commodities and Capabilities*, 1985. (鈴木興太郎訳「福祉の経済学—財の潜在能力」岩波書店、1988年)がある。彼は、福祉とは財の潜在能力を人間が知り、それを享受する能力を高めることだ、という主張を行ない、財の使用価値=財の特性とそれを人間の機能 (functionings) の実現へと変換する過程を検討している。例えば、パンを食べるとき、財の特性は栄養となる、対話しつつ食事をすればコミュニケーションの手段となる。また、A. 人間が栄養を摂取するとき、変換は1. 代謝率、2. 体のサイズ、3. 年齢、4. 性、5. 活動水準、6. 衛生条件、7. 医療サービスへのアクセスする能力、8. 栄養学的な知識と教育、9. 気候上の諸条件、B. 友人をもてなすとき、変換は1. 生活の場における社交界の性質、2. 家族や社会における人の立場、3. 結婚式など各種行事のありかた、4. 友人からの地理的距離。などに依存する、と主張している。

センによれば、財の特性の機能への変換は人間が財の潜在能力を知り、購入の機会を生かし、かつ、変換条件をふまえて使用価値を享受する能力をつくりだしてこそ可能となる。価値と人間の享受能力の結合という視点は倫理的な価値とは区別された独自の経済的価値と人間が(おそらくは倫理的援助を得て) つくりだす社会システムとの関係を問うことになるであろう。

居ることが必要である。』<sup>14)</sup>

ここで、河上がラスキンの「価値あるもの」とはどのような内容のものか、をさらに追求し、享受能力を高めるための社会システムはどのようなルールによって可能となるか、を具体的に考えたとすればラスキンの主張を積極的に評価する手がかりが拡大されたものと思われる。そして、現代的課題の解決のために、重要な問題を合せて提起しえた可能性があると考えられる。しかし河上はこの道を選ばなかった。

例えばラスキンの価値論は財の特性の生産とそれを享受する能力を育てるシステムと密接な関係をもって構成されている。財の特性を創りだすには創造としての労働が必要であり、それを公正に評価して享受するには学習や知識の修得が不可欠である。すべての財は直接に消費に役立つだけでなく生産における創造と消費における享受の力量の発達にあたって、科学や思考の素材として位置づけたとき、どれほど有用であるか、という視点からも合せて評価されることになるであろう。

ラスキンは「価値あるもの」は、常に二重の性質を含んでいると考えていた。従来の経済学者は、今日でも、財には使用価値があり、それには人間の欲求を充足するという性質があることを認めている。例えば「パンは食欲を満たす」というときにはパンは食欲を満たしてくれるという使用価値がある、と想定する。しかし、ラスキンは、パンは人間の生命活動を支えるという価値とパンによって人間が食卓につき対話を楽しみ、その素材や形状を研究して抽象的科学を身につけるといふ側面を同時に検討して、直接に生命活動を支えうるシステムと抽象科学の研究を支えうるシステムを価値論から構成しようとするのである。これは要するに財の価値と人間の発達とは、常に相互関係のなかに置かれていて機械的人間は絶えず意識的人間のつくりだす制度やルールによって制約されているというに等しい。河上はラスキンの価値論に着目しながらも意識的人間によるルールづくりの問題を検討しなかったために財の享受能力ある人間

14) 河上肇、「社会問題管見」弘文堂、1918（大正7）年、全集第9巻。

をつくりだす、という問題を金銭的評価に惑わされない「道を求める人間」をつくりだすという意味に解していたと思われる。たしかにラスキンにもこの側面があることは否定できないが政治経済学の構想としては創造性を重視して享受能力を高めうる学習や社会のルールの設定に重点があったことも事実であろう。ラスキンは価値あるものとして次の項目を挙げている。

- 1 土地。一方では、食糧や機械力をつくりだし、他方では、観察や思考の対象として知力を生みだす。
- 2 住居と調度品または建築物（一方では平静に仕事をして社会的交流を助け温度と空気を健康に保ち、他方ではマナーとライフに影響する歴史的なものや建築美をもつ）  
生産用具（一方では労働を節約し、他方では抽象的な科学を援助する）。
- 3 食糧、医薬品、贅沢品。
- 4 書物。一方では事実に関する知識を蓄積し、伝達する力、他方では、生命力のあふれる高潔な感動を与え、知的活動を高める力をもつ。
- 5 芸術作品。基本的に書物と同じ力をもつ<sup>15)</sup>。

ここに述べられている価値あるものは、従来の経済学の常識となっている財の分類とは全く違うものである。普通は重視されない書物や芸術作品があり、固有価値のなかには土地、建築物、生産用具などのすべてにわたって、生産や消費のための有用さと並んで人間の知的活動との関連でみた有用性が挙げられている。

彼の把握した固有価値の範囲は驚くほど広くて、しかも、人間の労働や生活とのかかわりを人間の知的活動と不可分のものとして描いており、そして知識の蓄積や芸術作品のもつ独自の性質が強調されているとあってよい。これは彼が元来芸術評論家として都市における人間の生活のシステムを観察してきた態度と関連していて、都市や地域において人間が、それぞれに「命を育みつつ共存できる」システムこそ最も美しい空間であるとの主張が込められている。彼

15) J. Ruskin, *Munera Pulveris*, *op. cit.*, pp. 13-18.

は、しばしば、イタリヤの歴史都市を頭に描きつつ産業革命によって調和を破壊されたイギリスの都市を批判してきた。

彼は経済学の原点に生産ではなくて消費を置き、消費財を人間が消費して自分の生命力を高めて行く過程を基本として、人間の生命力を高めうるような消費財の生産がいかにして可能か、消費財を享受しうる人間の発達はいかにして可能かを考えることによって、消費の視点から生産や供給の問題を遡って考えようとしたのである。これは社会における人間の消費を支えるシステムの構想と不可分一体となった価値論の構想であって、ラスキンの政治経済学における独自性を示唆するに十分な内容をもっていると考えられよう。

#### IV 生産政策と分配政策の調整

貧乏物語における河上の富の分析とラスキン理論の応用の結果がラスキンの主張とやや異なる印象を受けるところがあるとすれば、それは従来の経済人を中心とした経済学者の主張、とくに金銭的評価至上主義を批判する際、社会の人々の倫理や道徳の重要性は強調するが、それを人権や法に具体化する過程やその効果については、部分的に触れてはいるものの、力点は置かれていないように思われることである。というのは河上は絶えず「心の改造」か「経済の改造」かという問題を出してきて「倫理の重視」か、「社会改革の重視か」という二者択一を迫る形を採っている。しかし、ラスキンらの主張は倫理を基礎としつつ、それを人権を守る法やルールにまで高めて社会を改革しようというのであるから法の問題は決定的に重要であり、先の二者択一論では法とルールの重要性についてのニュアンスはカバーできそうもない。この点は河上がラスキンに共感しつつも、ラスキンは人間の心の改造に全ての期待をかけた空想家であるという批判を受けると、それはそうだ、自分もそうだった、と反省してしまう一つの要因ともなった。のちに榎田民蔵の河上批判を検討する際に改めて検討してみよう<sup>16)</sup>。

16) 池上博「いま、河上肇『貧乏物語』を読む」東京新聞、1990年1月29日付け、夕刊3ページ。

このような論点を含むとはいえ、ラスキンの思想をも視野に収めた河上の政治経済学は当時の経済学の水準において十分に国際的評価に耐えうるだけでなく現在の経済学方法論をも根本的に変革しうる新しいパラダイムを提起したことは間違いない。この点を確認して結論としよう。

河上は社会政策学者が生産政策と分配政策を取扱うとき、絶えず生産政策を優位に置き、分配政策を生産政策の許す範囲内にとどめようとする態度をもっていることに不満であった<sup>17)</sup>。このような態度は結局のところベンサム主義の主張に帰着し自由放任によって分配の公正は達成されるということになってしまふ。しかし、分配の問題を経済学の外部にある倫理の問題とする立場も河上の納得をえられなかった。それでは分配のルール of 基準となるべきものが経済学による基礎づけを与えられていない、と彼は感じたからである。あくまで経済学を基礎としていて、しかも意識的人間や人間の欲求を全面的に取扱える経済学はないか。1918 (大正7) 年、河上は自らを含めて経済学者を「未決監」のなかにある囚人に例えていう。

「思うに若し人間にして、社会の利益を見ること全く自己及び自己の家族の利益を見るが如くならば、初めより何等の問題なけれども、只然らざるが為に、生産を至大ならしめんとすれば、分配適宜なるを得ず、分配を至当ならしめんとすれば、生産盛なるを得ざる訳にて、茲に経済上の最難問は横はる。……此意味において現代の経済学者は皆未決監の中に在り。……余も亦未決監中の一人、獄裡に坐して茲に四十の春を迎ふ

今もなほ惑ひに惑ひ重ねつつ

としのみ不惑の数に入りける」<sup>18)</sup>

しかし、河上は唯、迷っていたのではない。ファイトの研究を手がかりとし

17) 河上肇、社会政策学会第11回大会 (1917年12月22日) における報告、同全集別巻、年譜、228ページ参照。

18) 河上肇「未決監」、社会問題管見、1918 (大正7) 年、全集第9巻、218～219ページ。



て彼は機械的人間と意識的人間を区別し、機械的人間の世界を従来の経済学方法論でいう経済人の世界から脱却させラスキンのいう全人の世界へと視野を広げて行った。もし全人の世界が意識的人間の世界に対応するとすれば経済人と全人の双方を総合的に取扱う経済学が可能だったはずである。このような新しい経済学の方法の発展はラスキンと河上の努力によって端緒を開かれ、今、我々の前で解明と解決のときを待っているといえよう。そのときには労働や享受能力が創造ではなくて疎外されたものと深くかかわっているという要因を正当に評価してラスキンの意見を修正しつつ検討が重ねられるべきことは今更言うまでもない<sup>19)</sup>。

---

19) このような論点を財政学に応用した試みは池上惇「財政学——現代財政システムの総合的解明——」岩波書店、1990年。